

# イギリス第一帝国の発展と崩壊，あるいは共和国アメリカ 誕生への布石

—ベンジャミン・フランクリンの1750年代の活動について—

竹腰 佳誉子<sup>1</sup>

## The Development and Collapse of “First” British Empire, or the Preparations for the Birth of the United States:

On the Activities Done by Benjamin Franklin in the 1750s

Kayoko TAKEGOSHI

Email:kayoko@edu.u-toyama.ac.jp

キーワード：ベンジャミン・フランクリン，アメリカ独立革命，ネットワーク，ポリプ

Keywords : Benjamin Franklin, American Revolution, network, polype

### 1. はじめに

イギリス (Great Britain) の北米植民地に暮らすベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin) をはじめとする多くの知識人にとって，自分たちがイギリス人であることは疑う余地はなかった。本国との違いがあるとすれば，ただ自分たちが大西洋を挟んだ海の向こう側に暮らしているということにすぎなかった。このような思いは，フランクリンの様々な執筆物からも明らかである<sup>1</sup>。

フランクリンは，イギリス人としてイギリス帝国がさらに強大になることを予想し，また期待し，北米植民地において独立の機運が高まるまではイギリス帝国発展の担い手として北米植民地の存在価値と，その重要性をアピールすることに余念がなかった。結果的には，彼が当初目指したことは正反対となり，北米植民地はイギリスからの独立に成功し，そしてイギリス第一帝国は崩壊し，新生アメリカが共和国という大いなる実験をスタートさせることになったのは周知のことである。してみれば，フランクリンはイギリス人として，イギリス帝国の拡大，発展に寄与すべく北米植民地の存在を訴えていただけではなく，また一方では反植民地革命に勝利するために，アメリカ人として北米植民地の存在価値を

訴えていたとも考えられるのではないだろうか。つまりフランクリンの思惑は，イギリス第一帝国の拡大から北米植民地の独立，独立後の共和国アメリカの拡大へと大きく舵を切ったことになる。そこには帝国主義的思想，植民地主義的思想，そして反植民地主義的思想が複雑に絡み合いながら混在していたのだ。そしてフランクリンの中には，ホフスタッター (Richard Hofstadter) が「反知性主義」(anti-intellectualism) と呼んだ精神<sup>2</sup>や「アメリカ人とは何者なのか」ということを対外的に知らせようとする精神が連綿と流れていたと言える。このようなアメリカ独特とも言える精神が，アメリカの未来を牽引する「民主主義的アメリカ拡大主義」とも呼べるものを育てていったと考えられる。

本稿においては，フランクリンの1750年代の活動，特に印刷ネットワークに関する取り組み，「オルバニー連合案」(Albany Plan of Union)，そして同年代に執筆されたパンフレットを中心に読み直しを行い，1750年代当時のフランクリンの抱いていた，時にアンビバレントとも思われる思想がいかに共和国アメリカ誕生やその後のアメリカ政治に影響を及ぼしたのかを考察する。

<sup>1</sup> 富山大学教育学部

## 2. フランクリンと「印刷／情報ネットワーク」の拡大

フランクリンが実に様々な分野で活躍し、多大なる功績を残したことは周知の事実であるが、その中でも彼が最も力を注いだことのひとつが印刷業であった。フランクリンは1728年に発表した自らの墓碑銘において、“The Body of B. Franklin, *Printer*; Like the Cover of an old Book, Its Contents torn out, And stript of its Lettering and Gilding, Lies here, Food for Worms” (Franklin, *Papers of BF* vol. 1 111; emphasis added) と記している。ここには、印刷業に携わる者としての矜持を見て取ることができるだろうし、同じ年にフランクリンがフィラデルフィア (Philadelphia) で印刷業を開業したことを考慮すれば、フランクリン自身の印刷業での成功の誓いとして捉えることも可能である。

フランクリンが印刷所を開いた時には、フィラデルフィアにはすでに二軒の印刷所があり、その場所でまだ22歳の若きフランクリンが印刷業を営み、成功を収めることは決して容易ではなかったことは想像に難くない。大口の顧客である州や教会の印刷は、ウィリアム・ブラッドフォード (William Bradford) がすでに請け負っており、サミュエル・キーマー (Samuel Keimer) にはたくさんの個人のパトロンがついていた。そのような強敵といえる二人のライバルに対して、フランクリンの売りと言える点は、彼の高い印刷の技術力であり執筆力であった。この点に関してフランクリンは、自身が発行する新聞に対し“a better Type and better printed”と述べ、また町の有力者たちがフランクリンのことを“one who could also handle a Pen”と評価してくれ、多くの人々が後援してくれたり、激励してくれたりしたと語っている (Franklin, *Franklin Writings* 1364-65)。このようにして、フランクリンはフィラデルフィアの有力者たちの支援を勝ち取り、印刷業を営んでから10年も経たないうちにフィラデルフィア郵便局長となり、印刷業の分野において順調にキャリアを重ねていく。そしてフィラデルフィア郵便局で培った知識を植民地全土の郵便局に応用しようとした。当時の郵便局は、まさに情報の中枢であり、フランクリンはフィラデルフィアにとどまることなく、自分自身の印刷ネットワーク、言い換えるならば、情報ネットワークの拡大に向けて動き始める。

フランクリンの印刷ネットワークは、同業者とパートナーシップを締結することにより広がりを見せている。かつてジャーニーマンとして雇っていたジェームズ・パーカー (James Parker) とのパートナーシップを皮切りに、まず北部地域へのネットワーク拡大を試みている。フランクリンが競合する印刷所の数を注意深く考慮に入れながら広げたパートナーシップは、フィラデルフィアを除く植民地北部においては、ニューヨーク (New York)、ニューヘブレン (New Haven)、ニュージャージー (New Jersey)、ニューポート (Newport) にまで及んでいる。また南はチャールストン (Charleston)、さらにサウスカロライナ (South Carolina) 以南への拡大の試みとして、フランクリンはイギリス領西インド諸島 (British West Indies) においても印刷所の開設を支援し、パートナーシップを締結している。

フランクリンにとって、パートナーシップを結ぶことは、パートナーを自分自身の管理下に置くことを意味していた。つまりフランクリンは、パートナーシップを締結することにより、ただ単に利益を得るだけではなく、発行物を介して自分の考えを広く普及させること、また植民地の人々に必要と思われる情報や知識の普及、さらにはそれらをコントロールしていたと言える。フランクリンにとって、それは反知性主義的精神を普及させる手段でもあったはずである。例えば、フランクリンが25年間に渡って発行していた「貧しいリチャードの暦」 (“Poor Richard Almanack”) は、非常に幅広い地域で購読されていた (Franklin, *Franklin Writings* 1397)。フランクリンはその暦の余白を諺のような文句で埋めることによって、本などほとんど購入しない一般市民の教育に役立てていたが、注目すべき点はその内容が主として実利に直結しているものだったことである。それは反知性主義という手段でもって、これまでエリート層に限られていた知識の獲得を一般市民にまで広げる試みだった。

このようにフランクリンの印刷ネットワークは、北はニューポート、南に至ってはイギリス領西インド諸島まで拡大し、当時の北米植民地全土をほぼ網羅している。このことは、印刷業者をつなげるだけではなく、印刷業者が発行する印刷物を購読する読者までもつなげることを意味し、さらには植民地をひとつにしていると言うこともできる。フランクリンは、パートナーシップを締結する際、自分と同じ

信条をもっているかどうかということをも重要視していた。このようなある種の考え方の共有というものは、フランクリンが発行した印刷物をパートナーシップ先の印刷所で再発行することで実現される。このようにして、フランクリンの思想は北米植民地全域の読者に行き渡り、彼の印刷ネットワークはフィラデルフィア植民地を核として、ばらばらになっていた各植民地を思想的に、そして文化的にも拡大、そして統合しようという試みとしてみることもできるだろう。植民地全土に同じ情報や思想が浸透することにより、植民地の人々を同じ目標に向かわせることが可能になるのである<sup>3</sup>。加えて、そこで暮らす人々をフランクリンの理想の姿に近づけることさえも不可能ではないのである。つまりフランクリンが常に念頭に置いていたのは、この新世界に住む人々がどのような国民であるべきなのか、どのような人々が北米植民地にふさわしいのかという考えであり、これはフランクリンの帝国主義的な欲望と言えるのではないだろうか。この理想的な国民像については後で述べることにし、次にフランクリンの北米植民地拡大／統合の思想はどこに由来しているのかについて考えてみたい。

### 3. 「ポリプ」の特性と「拡大と統合」

フランクリンは、1751年にリチャード・ソーナダーズ (Richard Saunders) 名義で出版した “Poor Richard Improved” において、顕微鏡で観察したポリプについて記している。フランクリンは、クラゲやイソギンチャクといった刺胞動物の生活環上にみられる一時期の形態であるポリプを “that most unaccountable of all Creatures” (Franklin, *Papers of BF* vol. 4 93) と述べるとともに、その珍しい特性について次のよう書いている。

The young ones [polypes] come out of the Sides of the old, like Buds and Branches from Trees, and at length drop off *perfect* Polypes. They do not seem to be of different Sexes. . . . The Animal's Body consists of a single Cavity, like a Tube or Gut, and what is wonderful, and almost beyond Belief, is, that it will live and feed after it is turned inside out, and even when cut into a great many Pieces, each several Piece becomes a *complete*

Polype. They are infested with a Kind of Vermin, as are almost all Animals from the largest down to Bees and other Insects. These Vermin sometimes in a long Time will eat up the Head and Part of the Body of a Polype, after which, if it be cleared of them, it shall have the devoured Parts grow up again, and become as *complete* as ever. (Franklin, *Papers of BF* vol. 4 93; emphasis added)

どのような状態からも「完璧なポリプ」が誕生するという驚くべきポリプの生態は、フランクリンにとって大変興味深いものであったことは間違いない。フランクリンのポリプに対する強い関心は、フランクリンが同年に友人たちに配布したパンフレットである「人口の増加に関する考察」(“Observations Concerning the Increase of Mankind,” 1751<sup>4</sup>) において、「うまく調節された国家」(“A Nation well regulated”) についてポリプの生態に例えながら、次のように描写をしていることから明らかである。

In fine, A Nation well regulated is like a Polypus; take away a Limb, its Place is soon supply'd; cut it in two, and each deficient Part shall speedily grow out of the Part remaining. Thus if you have Room and Subsistence enough, as you may by dividing, make ten Polypes out of one, you may of one make ten Nations, equally populous and powerful; or rather, *increase a Nation ten fold in Numbers and Strength.* (Franklin, *Papers of BF* vol. 4 233-34; emphasis added)

このパンフレットは、1750年にイギリス帝国が植民地の鉄製品の生産を制限する鉄条例を施行したことに対抗して書かれたものであり、本パンフレットにおいて、フランクリンはイギリス帝国にとって北米植民地がいかに重要な存在であるかを訴えている。そして海の向こう側の北米植民地が有する地の利を具体的に説明しながら、イギリス帝国の益々の強化に献身しようとする自分の思いや決意を述べている。顕微鏡でのポリプ観察で得た知識に基づき、フランクリンはイギリス帝国をポリプに例え、それが今やどんなに偉大な存在になっているかを語った



のだった。

一匹のポリプを切っても同様の十匹のポリプが生まれるのと同じように、「古いポリプ」であるイギリス帝国から「新しいポリプ」である植民地を続々と誕生させることが可能であるということである。見逃す事ができない点は、フランクリンが議論をさらに進めて「国の人口と力を十倍に増やす」ことができる」と指摘していることにある。つまり十個、それぞれ個別の「国家／植民地」ではなく、連合した十倍の国家こそが最強であるということである。本国イギリスとそこから誕生した「完璧なポリプ」である北米の各植民地は、今後ますます人口や力の増大が見込まれており、本国と北米植民地はあくまでも対等な立場で力を合わせるこそが全体の繁栄に繋がっていくのである。

このような「連合の思想」-つまり同じ目的を持つものが包括的に連合することによってその力を何倍にも増大させることが可能であるということ-は、先に述べたフランクリンの印刷ネットワークの拡大の発想にも繋がっており、また強く反映されていると考えられる。事実、フランクリンの印刷ネットワークは「ポリプの観察」や「人口増加に関する考察」が執筆された時期と全く同じ1750年代に広がりを見せているのである。

#### 4. 「オルバニー連合案」に見る新しい政治の形

「ポリプの観察」や「人口増加に関する考察」を執筆したちょうど同じ時期に、フランクリンは植民地における先住民問題と植民地の防衛に対処するための北米植民地連合の可能性について模索していた。いわゆる「オルバニー連合案」のことである。この考えは、前述した印刷業のパートナーシップを結んでいたパーカーがニューヨーク州議会議員アーチボルト・ケネディ (Archibald Kennedy) が書いたパンフレット「先住民の友情を手に入れ保持することのイギリスの利益にとっての重要性の考察」(*The Importance of Gaining and Preserving the Friendship of the Indians to the British Interest, Considered*, 1751) をフランクリンに送付し、フィラデルフィアで再販することについて助言を求めたことに起因している。フランクリンはパーカーへ次のように返信し、再販に賛同の意向を示している。

I have, as you desire, read the Manuscript you

sent me; and am of Opinion, with the publick-spirited Author, that securing the Friendship of the Indians is of the greatest Consequence to these Colonies; and that the surest Means of doing it, are, to regulate the Indian Trade, so as to convince them, by Experience, that they may have the best and cheapest Goods, and the fairest Dealing from the English; and to unite the several Governments, so as to form a Strength that the Indians may depend on for Protection, in Case of a Rupture with the French; or apprehend great Danger from, if they should break with us. . . . if six Nations of ignorant Savages should be capable of forming a Scheme for such an Union, and be able to execute it in such a Manner, as that it has subsisted Ages, and appears indissoluble; and yet that a like Union should be impracticable for ten or a Dozen English Colonies, to whom it is more necessary, and must be more advantageous; and who cannot be supposed to want an equal Understanding of their Interests. (Franklin, *Papers of BF* vol. 4 117-18; emphasis added)

フランクリンは「連合することによって生まれる力」について確信している。各植民地は連合できないから弱く、フランスや先住民から攻撃や被害を受ける現状に苦しんでいる。したがって、各植民地が連合することはフランクリンにとっては必然だった。だからこそ無知な野蛮人たちが連合を作ることができて、北米植民地にできない訳はないし、北米植民地の利害関係についても共通理解はできているはずであるとして、北米の各植民地の連合の可能性について自信をのぞかせているのである。

しかし、当時の各植民地にはすでに独自の文化、そして政府があり、それぞれの植民地の繋がりは非常に弱いものでしかなかった。それゆえ複数の植民地政府の連合計画がフランクリンの強い確信や信念に反して、想像以上にうまく進まなかったことは、自然の流れだったといえる。結局連合案は各植民地からノーを突きつけられ、否決される結果となっている。晩年フランクリンはこの件について、『自伝』(*Autobiography*) の中で次のように回想している。

By this Plan, the general Government was to be administred by a President General appointed and supported by the Crown, and a Grand Council to be chosen by the Representatives of the People of the several Colonies met in their respective Assemblies. . . . Many Objections and Difficulties were started, but at length they were all overcome, and the Plan was unanimously agreed to, and Copies ordered to be transmitted to the Board of Trade and to the Assemblies of the several Provinces. Its Fate was singular. The Assemblies did not adopt it, as they all thought there was too much *Prerogative* in it; and in England it was judg'd to have too much of the *Democratic*: The Board of Trade therefore did not approve of it; nor recommend it for the Approbation of his Majesty; . . . (Franklin, *Franklin Writings* 1430-31)

フランクリンは、否決の理由についてイギリス本国が連合案をあまりにも民主主義すぎると見なしたことにあと述べているように、確かに本案には民主主義的側面を見ることができる<sup>5</sup>。フランクリンは海の向こう側に暮らすイギリス人として、イギリス帝国の繁栄を強く望んでいたが、当然のことながら本国と北米植民地が主従関係にあることを望んでいたわけではなかった。このことは、すでにポリプの引喩の箇所でも述べておりである。フランクリンは同じイギリス人として、あくまでも本国と植民地が対等な関係を保つことにより全体の繁栄が期待できると考えていたのである。

この点に関しては、フランクリンがマサチューセッツ (Massachusetts) 総督のウィリアム・シャーリー (William Shirley) に宛てた書簡においても、彼の姿勢は明らかである<sup>6</sup>。フランクリンは、イギリス帝国の全体会議の選挙に植民地の人民を全く参加させないことの不当さを訴えるとともに、総括的な政府に植民地の人民を入れることの合理性を次のように語っている。

That the People in the Colonies, who are to feel the immediate Mischiefs of Invasion and Conquest by an Enemy, in the Loss of their

Estates, Lives and Liberties, are likely to be better Judges of the Quantity of Forces necessary to be raised and maintain'd, Forts to be built and supported, and of their own Abilities to bear the Expence, than the Parliament of England at so great a Distance. (Franklin, *Papers of BF* vol. 5 444)

つまり、オルバニー連合案で検討された植民地における防衛について考える場合、当然のことながらそこに暮らす者が状況を最も把握しており、最も的確な判断を下すことができる。だからこそそこで暮らす者たちが最も多くの負担を担うことも厭わないのである。ここにフランクリンの理想する政治体系である「民主政治」の形がよく表れていると言えるだろう。

そしてオルバニー連合案に対して本国が恐れたことは、植民地連合が民主主義すぎることに加えて、ウッズ (Gordon S. Wood) が指摘しているように、連合することによる北米植民地の強大化であったと言えるのではないだろうか (Wood 76)。フランクリン自身、「連合することによって生まれる力」の大きさについてはすでに十分に認識していた。だからこそ、彼は積極的に印刷ネットワークを拡大しようと試みたのである。

先に引用したポリプの生態や「人口増加に関する考察」をここで思い返してみたい。「古いポリプ」であるイギリス帝国から誕生した「新しいポリプ」である十個の各植民地のみが結合する可能性ももちろんあり得るのだ。このことは、北米植民地が今後本国以上の力を保有することを示唆しているのとらえることもできるだろう。ゲーディ (Sean X. Goudie) は、ポリプが辞書において生物学上「群体動物」(“colonial animal”)として分類されていることに着目し、その辞書的意味を考慮し<sup>7</sup>，“they represent individual colonies/countries, polypes might logically threaten as colonial animals to break off from the parent to form their own polype”(Goudie 39-40)と指摘している。また害虫がポリプに群がり、貪り尽くしたとしても、残った部分は再び成長して完全なポリプとなるというポリプの生態を考慮に入れると、1760年代にイギリス帝国が植民地に導入しようとした新たな課税である砂糖法や印紙税法によって、北米植民地をまさに主従

関係によって搾取の対象としたとしても、北米植民地は決して朽ちることなく、完璧に再生するということを暗示しているとも考えられる。

してみれば、フランクリンが執筆した「人口増加に関する考察」のパンフレットは、意図せず北米植民地が内在する力を本国に改めて認識させ、そして本国に警告すると同時に警戒させることにつながったのかもしれない。確かに1750年代当時のフランクリンはイギリス国民としてイギリス帝国の強大化に専心していて、本国からの独立についてはいささかも念頭になかったと考えられる。実際フランクリンは、1754年にシャーリー総督に宛てた書簡の中で次のように述べている。

I should hope too, that by such an union, the people of Great Britain and the People of the Colonies would learn to consider themselves, not as belonging to different Communities with different Interests, but to one Community with one Interest, which I imagine would contribute to strengthen the whole, and greatly lessen the danger of future separations. (Franklin, *Papers of BF* vol. 5 449-50)

フランクリンは自分自身を含む北米植民地の人々は本国と同じ共同体に属する仲間であることを強調している。

しかしながらその一方で、本国では“many British officials continued to worry, as they had for decade, that the colonies were becoming too rich and strong to be governed any longer from London”(Woods 76)という状態が続いていたのである。フランクリンのイギリス帝国と北米植民地の関係性に関する文章は、帝国主義的に、あるいは植民地主義的にイギリス帝国の発展を声高に叫びながら、同時に反植民地主義的に主従関係に依らない民主主義的な北米植民地の強大化の大いなる可能性を暗示している。それは常にコインの裏表のように「イギリス帝国の発展」と「イギリス帝国の崩壊／北米植民地の独立」の両方に働きかけるものになっていたと考えられる。

## 5. イギリス／アメリカ国民としての帝国の欲望

フランクリンはイギリス帝国繁栄に関連して、イギリス（アメリカ）人至上主義、あるいは白人至上主義とも呼べる、人種差別的な態度をとっている。既述した「人口増加に関する考察」において、フランクリンは以下のように白色人種に対する強いこだわりを見せている。

Which leads me to add one Remark: That the Number of purely white People in the World is proportionably very small. All Africa is black or tawny. Asia chiefly tawny. America (exclusive of the new Comers) wholly so. And in Europe, the Spaniards, Italians, French, Russians and Swedes, are generally of what we call a swarthy Complexion; as are the Germans also, the Saxons only excepted, who with the English, make the principal Body of White People on the Face of the Earth. I could wish their Numbers were increased. And while we are, as I may call it, *Scouring* our Planet, by clearing America of Woods, and so making this Side of our Globe reflect a brighter Light to the Eyes of Inhabitants in Mars or Venus, why should we in the Sight of Superior Beings, darken its People? why increase the Sons of Africa, by Planting them in America, where we have so fair an Opportunity, by excluding all Blacks and Tawneys, of increasing the lovely White and Red? But perhaps I am partial to the Complexion of my Country, for such Kind of Partiality is natural to Mankind. (Franklin, *Papers of BF* vol. 4 234)

フランクリンはナショナル・アイデンティと呼ぶべきものを人種化しており、国民とは人種的差異に基づくべきものであると考えていたと読み取ることができるだろう。しかしながら、ここではフランクリンは、いわゆる植民地において権力の所有者が誰の目にも明らかになるように、社会の中で人種による境界線を作ろうとしていたわけではないと考えられる。つまり人種的差異によるナショナル・アイデン



ティティの必要性というより、今後ますます発展していく「新世界」にふさわしい人物像について考え、また対外的にアピールしていたように思われる。

白人入植者が切り開いたアメリカに暮らすにあたってふさわしい国民は、白色人種であり、労働力としてアメリカに向けてどんどん輸出されている黒人奴隷ではないのである。この地球を磨き上げて、火星や金星の住人たちにこちら側が輝いて見えるように日々勤めに励んでいるのは、アメリカに暮らす白人たちである。つまり、アメリカにふさわしい者とは勤労に従事する白人のことである。この時点において、フランクリンが黒人奴隷はアメリカにはふさわしくないと考えていた理由は、そもそも黒人奴隷が労働力としてさほど安価でないばかりか、それ以上に彼らがいることによる自分たち白人に対する悪影響にあったと考えられる。

フランクリンは「人口増加に関する考察」において、イギリス領西インド諸島における奴隷について言及している。フランクリンは、そこに連れて来られた黒人奴隷のために白人の数が少なくなっていることや、貧乏人が職を奪われる一方で、少数の白人たちが莫大な富を独占している状況を嘆いている。また奴隷所有者である白人たちは、仕事もせず堕落しており、子供達までも傲慢になっていることを憂慮している (Franklin, *Papers of BF* vol. 4 231)。フランクリンは、北米植民地においても、このイギリス領西インド諸島と同じような状況になることをひどく恐れていたのではないだろうか。

フランクリンもイギリス領西インド諸島のこのような状態に対して、ただ手を拱いていただけではなかった。フランクリンはこの状況を正すために、つまりそこに暮らす人々の啓蒙を図るために、白人入植者が行うようにイギリス領西インド諸島にまで印刷ネットワークを広げたのである。このフランクリンの試みは、一旦は成功したかに見えたが、結局パートナーシップを結んだ人物は次々に事業を失敗してしまい、そこで暮らす人々の矯正に関しては道半ばにして諦めざるを得ない結果となっている。

フランクリンにとってイギリス領西インド諸島は、その地理的特徴も相まって、一時期は新しいフロンティアのような存在であり、そこまでの拡大を目論んでいたのは確かである。だからこそフランクリンは、1740年代の終わり頃から70年代初頭にかけて実に長きに渡ってイギリス領西インド諸島への

印刷ネットワーク拡大に尽力している。しかしながら、およそ30年間にわたるこの挑戦が失敗に終わってからは、フランクリンはもはやイギリス領西インド諸島での印刷業の展開を諦めて、さらにはその土地、そしてそこで暮らす人々の啓蒙に見切りをつけてしまったのである。つまり北米植民地連合に加えることは適切ではないという判断を下したと考えられる。

フランクリンは30年間にわたるイギリス領西インド諸島との印刷業を介した間接的な関わりから、「人口増加に関する考察」に記していたことに加えて、イギリス領西インド諸島に暮らす人々は概してお金に関してだらしなく、また彼らの飲酒習慣も仕事の量と質を共に低下させていることを十分に認識していた。このような特徴を持つ彼らは、当然のことながらフランクリンの目指す理想的な人物像からはかけ離れていたといえる。フランクリンは親戚を含め何人もの知り合いたちを印刷所の開業のために、イギリス領西インド諸島に派遣していた。それにもかかわらず『自伝』にはこれらのエピソードやイギリス領西インド諸島に関する記述はほとんど存在していない。たまに現れるイギリス領西インド諸島に関する記述は、概してフランクリンがあまりよく思っていない人物たちがそこへ逃亡するというものばかりである<sup>8</sup>。イギリス領西インド諸島は、北米植民地と対照的な存在として、反アメリカ的なメタファーとしての役割を果たしていると言える。何故ならば、そこでは白人たちが勤めに励むことがないからであり、クレヴクール (J. Hector St. John de Crèvecoeur) の言葉を借りれば、西インド諸島で暮らす人々が “the western pilgrims who are carrying along with them that great mass of arts, sciences, vigour, and *industry*” (Crèvecoeur 70; emphasis added) ではないからである。フランクリンが理想とした典型的なアメリカ人とは、彼が「アメリカへ移住しようとする人々への情報」 (“Information to Those Who Would Remove to America,” 1784) において示しているように勤労に従事する白人であり、“useful Members of Society”(Franklin, *Franklin Writings* 977) であった。

ホフスタッターは、『アメリカ政治における偏執的なスタイル』 (*The Paranoid Style in American Politics*) の中で、人々は政治活動において自らを表現し、何者であるかを明らかにすると述べている

ように (Hofstadter, *Paranoid Style* xxxiii), フランクリンは政治家として非常に早い段階で「アメリカ人とは何者か」ということを対外的に示すことを意識していたのだ。

## 6. まとめ

北米植民地に暮らすイギリス人として、フランクリンはイギリス帝国そして北米植民地の強大化を図るべく、またさらなる発展が見込まれる「新世界」に暮らすのにふさわしい人材の育成のために、印刷ネットワークの拡大や北米の各植民地の連合に尽力してきた。印刷ネットワークにより、必要な情報伝達を効率化させ、出版物を介して植民地の市民たちを教育し、反知性主義的に知識の平等化を植民地に浸透させることに成功している。その一連の活動は、異なった文化や政府を持つ各植民地を統合し、やがては北米植民地独立につながる、より強い植民地連合誕生への布石として捉えることができる。先述したようにオルバニー連合案は、発案当時はフランクリンの思い通りにはならなかったわけであるが、彼の描いた理想—イギリス帝国に従属しない、民主主義に基づく包括的で強力な植民地連合—は、その後の連合規約や合衆国憲法へと時間はかかりながらも連綿と受け継がれていくことになる。

またフランクリンがオルバニー連合案を熟慮していた時に、フィラデルフィアより西側に新たな植民地の建設を考えていたことを考慮すれば (Franklin, *Papers of BF* vol.6 468-69), 彼が北米植民地連合のみならず、ポリプが次々と誕生するようにさらなる北米植民地の拡張を目論んでいたことは明らかである。もちろん当時はイギリス帝国の拡張を狙ったものであるが、それはコインの裏表のようにいつでも反対に転がる準備はできていたのである。グーディは、アメリカを植民地主義、あるいは帝国主義の国だと言う者もいれば、民主主義的な共和国だと言う者もいると指摘しているが (Goudie 12), フランクリンの時代から北米植民地あるいは独立後のアメリカ共和国はまさにそのような国であったのだ。フランクリンが抱いていた、時としてアンビバレントとも言える思想は、アメリカ共和国が西へ西へと太平洋まで領土を拡大していく未来予想図を連想させるものであり、フランクリンの時代から「明白な運命」(Manifest Destiny) へと続く思想、アメリカ拡大主義は密かに育まれていたことがわかる。

## 謝辞

本研究は、JSPS 科研費 20K00386 の助成を受けたものです。

## 注

- 1 例えば、1751年にマサチューセッツ総督のウィリアム・シャーリーに宛てた書簡において、自分たちのことを「海のこちら側のイギリス臣民」(“the British Subjects on this side the water,” Franklin, *Papers of BF* vol. 5 449) と呼んでいる。
- 2 フランクリンと反知性主義については、竹腰「ベンジャミン・フランクリンと知のコミュニティ」を参照のこと。
- 3 竹腰「ベンジャミン・フランクリンと知のネットワーク (1)」を参照のこと。
- 4 フランクリンは、友人であり、パトロンでもあったピーター・コリンソン (Peter Collinson) らにこのパンフレットを初めて送っている。その後このパンフレットは1755年にロンドン (London) で初めて出版され、1760年、1761年には、ダブリン (Dublin)、ボストン (Boston)、フィラデルフィアで出版されている。
- 5 本案において、各植民地の代表から成る連合議会の構成員はそれぞれの植民地から選ばれるものとし、そこにイギリス国王は介在していないという点。
- 6 廃案とされた「オルバニー連合案」の対案としてシャーリーから提示されたものに対して、フランクリンは三通の書簡において自分の意見を示した。
- 7 グーディは *Webster's New Universal Unabridged Dictionary* において “colonial animal” は “as a collective life form comprising associations of individual organisms that are incompletely separated, as corals and moss animals or, secondarily, as any of the individual organism in such a life form” として定義されていると記している (Goudie 39)。
- 8 例えば、フランクリンの印刷業のライバルだったキーマーは、フランクリンが印刷業を開業以降、商売が衰え、結局印刷所を売り払いバルバドス島へ行き、貧乏暮らしをすることになる。

## 引用文献

Franklin, Benjamin. *The Papers of Benjamin Franklin*. Vol.1-6. Edited by Leonard W. Labaree



- et al., Yale UP, 1959-63.
- . *Benjamin Franklin Writings*. Edited by Carl Van Doren. The Library of America, 1987.
- Goudie, Sean X. *Creole America: The West Indies and the Formation of Literature and Culture in the New Republic*. Univ. of Pennsylvania Press, 2006.
- Hofstadter, Richard. *Anti-Intellectualism in American Life*. Vintage Books, 1962. (『アメリカの反知性主義』 田村哲夫訳, みすず書房, 2003年)
- . *The Paranoid Style in American Politics and Other Essays*. Vintage Books, 2008.
- St. John de Crèvecoeur, J. Hector. *Letters from an American Farmer and Sketches of Eighteenth-Century America*. Edited by Albert E. Stone. Penguin Books, 1986.
- Wood, Gordon S. *The Americanization of Benjamin Franklin*. Penguin Books, 2004. (ゴードン・S・ウッド『ベンジャミン・フランクリン, アメリカ人になる』 池田年穂・金井光太郎・肥後本芳男訳, 慶應義塾大学出版会, 2010年)
- 竹腰佳誉子 「ベンジャミン・フランクリンと知のネットワーク(1)」『富山大学人間発達科学部紀要』10巻2号, 2016年, 257 - 63頁.
- . 「ベンジャミン・フランクリンと知のコミュニティーフィラデルフィア図書館会社を中心に」『英文学研究 支部統合号』10巻, 2018年, 129 - 37頁.

受付年月日 (2022/10/19)

受理年月日 (2022/12/20)